

あっぱれ道産子魂

日本中を熱狂させたアテネオリンピックが閉幕しました。今回は予想以上の日本人選手のメダルラッシュで、37個のメダル数はロサンゼルス大会の32個の記録(東側諸国が大会をボイコットしたことによる産物?)を塗り替えました。一方、オールプロ選手の「ドリームチーム」で挑んだ野球や、女子バレーボールなどの団体の球技は、残念ながら期待ハズレに終わった大会でもありました。

夏の高校野球では、南北海道代表の駒大苫小牧が快挙を成し遂げました。PL学園に圧勝した日大三高や横浜高校といった優勝候補を次々と破り、決勝戦では春の優勝校の強豪 済美高校に4点差をひっくり返して勝ち、初の全国優勝を遂げました。夏の大会では、過去準優勝はあの太田投手のいた青森県の三沢高校というのがありますが、優勝となるとあの江川投手の母校、栃木県の作新学院が最北端でした。夏の大会86回目にして優勝旗が「白河の関」どころか、いっきに「津軽海峡」をも超えて北の大地に降り立つことになりました。

最近では、東北や四国を中心に地方の私立高校は知名度を上げるため、又、有力選手は激戦区よりも校数が少ない地方の方が甲子園に出易いとの思惑から野球留学が盛んになっています。あの昨年準優勝した東北高校のダルビッシュ投手も実は大阪出身です。しかし、駒大苫小牧は、監督さんは九州出身ですが、ベンチ入りの選手は全員北海道出身です。冬期は雪のためグラウンドでの練習がほとんどできないことや、夏の甲子園の炎天下での厳しい気象条件というハンディから、東北や北海道のチームは甲子園ではなかなか勝ち進むのがむずかしいといわれてきたものです。

グラウンドが使えない冬期はウエイトトレーニングを中心に筋力を強化し、その成果がチーム打率4割4分8厘と大会記録を更新する圧倒的な攻撃力に表れたのではないのでしょうか。グラウンドの雪をブルドーザーでかき、凍った土の上でノックをしたこともあったそうです。さらに、この快進撃の原動力は、「昨夏の甲子園での敗戦の悔しさ」と監督と選手は口をそろえています。昨夏の1回戦での対 倉敷工に4回まで8 - 0とリードしながら、降雨のためノーゲームとなり、翌日の再試合では2 - 5と敗れた、あの敗戦の悔しさがチームの始まりだったそうです。

試合中ピンチになりピッチャーマウンドに集まったときに必ず全員が人差し指を天に向かって差し出します。これは、「常にナンバーワンを目指そう」とのスローガンを表しているそうです。ずば抜けた選手がいるわけでもなく、「個人力」よりも「チーム力」が大切であるという高校野球の原点を感じさせるすばらしいチームだと思います。33歳の若き監督が勝利のインタビューで、涙ながらに「道産子が頑張りました!」と叫んでいたのが印象的です。雪国のハンディを乗り越え、「やればできる」ということを証明した全国制覇は正にあっぱれです。

アテネオリンピックを終えて卓球の 福原 愛ちゃんが感想を述べていました。「オリンピックはすごい所でした。緊張した時に、どれだけ自分の力が出せるかが大事だと思う。技術より精神面です」と。大舞台でいかに力を発揮するか。駒大苫小牧のように一戦一戦大舞台で強くなっていくチームもありますが、オリンピックで勝たなければという重圧からか、大事な場面で力を発揮できずに惜しくも銅メダルに終わってしまった野球チーム。しかし、ホームランバッターの送りバントや一塁でのヘッドスライディングなど、ペナントレースにはない高校野球を思わせる感動したプレーもありました。一発勝負の厳しさ、大舞台での力の結集の難しさというものを強く感じました。

オリンピックに気をとられているとプロ野球の方は、セ・リーグの優勝の行方はほぼ見えてきたような?セ・リーグの「ドリームチーム」Gのメイクドラマは再現するのか、はたまた来期はひょっとしたらパ・リーグに移籍してしまうのか、選手のストは行われるのか・・・球界再編問題からも目が離せなくなりましたが、TはせめてAクラスに、と願うのですが・・・。